

Title	貿易用英語電報文の特徴
Author(s)	羽田, 三郎
Citation	大阪外国語大学学報. 6 p.45-p.54
Issue Date	1958-04-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80134
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

貿易用英語電報文の特徴

羽 田 三 郎

Telegraphese in Foreign Trade Correspondence

Saburô Haneda

S U M M A R Y

The English of telegraphic messages as seen in Japanese foreign trade circles, though technically classified as *plain language*, is far from normal from an ordinary grammatical point of view. Omissions are far more frequent and arbitrary than are usually explained as ellipses in grammar. But there must be a limit if the language is to remain English, and a businessman, no matter how eager he may be to save expenses, cannot mutilate Queen's or President's English beyond that limit without courting disaster upon himself.

In this paper, the general character, vocabulary and syntax of telegraphese are briefly reviewed. Though close in character to headlines as 'block language' telegraphese has its own features: long words rather than short are preferred irrespective of euphony; peculiar words are coined by the promiscuous use of prefixes and suffixes such as *un-* and *-able* (e. g. unofferable, unshippable, unbankable).

In headlines, sentences are mostly built up around verbs of *-s*, *-ed* & *-ing* forms and *to*-infinitives with their tenses and voices pretty well established. In telegraphese, however, zero-form verbs may be imperative or first-person present with *we* or *I* omitted; the *-ed* form may be preterite (active) or past participle (passive); and the *-ing* form is used in at least three ways—present, present progressive and future. Predication without copula is also very frequent.

Mechanical handicaps such as the lack of small letters and the very sparing use of punctuation marks also contribute to the development of peculiar wide-order.

Possible confusions and the devices to avoid them are discussed with examples.

I ま え が き

戦後の貿易界で起った大きな変化の一つは国際電気通信の発達（電報, Telex, 写真電報, 電話）とそれに伴う言葉の使い方である。暗語（Code）は戦前の地位を失い、今日商用国際電報の約八割は普通語（俗にいう平文 Plain Language）で書かれ、そのため英語を相当 mutilate（不具化）した奇態な文体が生れつつある。しかし電信規則上では「その国語の用法に反した連結や変改」をすることなく「意味のわかる文章を構成」せねばならぬことになっている。実際上もあり勝手の短縮をしては当事者にすら通じなくなり、また規定をあまり stretch（拡大乱用）しては、必ずしも国際的に popular でないわが貿易界が更に国際的信用を失うであろう。

そこで、どのように単語を選び文章を構成すれば英語の特性に著しく反することなく、最少語数で最大内容を盛れるか？ 具体的テクニックは貿易人の日夜苦心するところであるが、本稿は先ず現状をやや文法的に検討する。

本学のように恵まれたところでは、数ヶ国語について比較を行えば各国語の特徴がわかって有益と思うが、筆者は英語しか扱えないので幼稚な報告になるが、なるべく各分野の方々から御叱正・御教示を賜わらば幸いである。

（附）日本語との比較は日常実務家の経験するところで、ローマ字電報は暗語に次いで経済的である。英語の半分とまでは言えなくても約三分の二の語数で同じ用件を足せる。「真鍮針金/原料難で/御指定の期日までに/積めない」をローマ字では SINTYUUHARIGANE GENRYOONANDE KIZITUMADENI TUMENAI（4語）の如く助詞・助動詞をそれぞれ直前の語に連結することが認められている。英語の前置詞や助動詞にはそのような特典がないから BRASS WIRE MATERIAL SHORT UNSHIPPABLE DATE NAMED（7語）のようになる。Material short の如き Copula（繫辞）なき敘述を活用し、(by the) date named の如く出来る限り省略し、更に unshippable (=can not ship) のように異常な語形成を敢行しても、なお「真鍮針金」「原料難」など単語の概念も違うので不利である。‘unshippable date named’ は ‘unshippable betimes’ 更に ‘delays’ とすれば一層節約できるが、日本語の方も ‘maniwawanai’ とか ‘tumiokureru’ となって、やはり英語の方が不利である。英語から前置詞・助動詞を奪うと文章構成が相当苦しくなる一例である。

II 文法上の位置

英文法では電文の如きはどう扱われるか？「文」とは何ぞやなどと始める余白はないが、形態に着目すれば省略文、不完全文、無定形文など文法家によって各種の分類・名称がある。意味を重視すれば一語でも文になる。電文は形式的にはたしかに尋常でなく、意味はわかるというものの当事者間のみとか貿易実務に通曉している者でなければ理解困難な特殊社会の言葉である。従

って英語一般を説明する文法では、特殊簡約文体の一つに電報文のあることを軽く述べる程度でもよいわけであろう。しかも英文法でいう「省略」は省略部分の補充容易で且つ省略しない形式も併行して使われることが多く、甚だしく慣用的で補充困難なものや簡約な形式しか使わないものは「省略」とは言い難い。わが貿易界が発受する電文の如きは「省略」というよりはむしろそのまゝ伝達目的を達する一種の文であって、実際作成に当たっても正常な文を先ず作ってそれを「省略」するわけではない。

言葉の節約は或る程度普遍的で電文に限ったことでもない。No Smoking や Fragile (われもの) のような看板・付箋の類や会話における短い問答 (“Ready?” “Not yet.” 「いゝか？」 「まだ」) などは場面に大部分依存し、No pains, no gains (まかぬ種は生えぬ), Easier said than done (言うは易く行うは難し) のような諺や警句の類ではムダな部分の Suppression (抑制) によって表現効果を上げている。詩にも省略が多く、書物の表題や新聞の見出し (Headline) はますます電文に近づく。たゞし、これらには韻律法や紙面の制約が少しはあるとしても、電文における外的制約——料金節約すなわち語数節約のみならず機械的制約——例えば大文字しか使えない；句読点はあっても極力節減する；好きなところで行を改めたり字体を変える自由はない——かかる外的制約は他の簡約文には少ない条件である。これらの事情からどのような語法が生れるか、またそれが英語の特性をうかがう一端緒ではないかと考える。

こゝで想起するのは佐々木達教授が「語学試論集」で紹介批判しておられるスイス人 Heinrich Straumann の *Newspaper Headlines: A Study in Linguistic Method*, London, 1935 である。最近では「英語青年」第百三卷第六号にも堀内克明氏の『Headline の発達』がある。これらを総合すると Headline のことばは分節の程度の低い言語 ‘block language’ であるが「文化的背景」や「言語習慣」から広く一般に理解され、遠く十七世紀から次第に形式が整理されて来て、今日特にアメリカでは「-ed, -s, to, -ing によって動詞が活用し、一定の文法的関係を示す新言語が成立しかけているとみられないこともない」とまで観察されている。Straumann・佐々木氏は言語研究の方法論として、堀内氏は主に Headline そのものの発達史として扱っておられ、共に筆者当面の関心事とは違うが、電文の性格や形式を見るのに参考になる。以下随時比較しつつ電文の観察に入る。

資料は英米人の筆に成る権威ある英文というわけには行かぬが、主として筆者が実務從事中に扱った例によるから机上の空論ではない。最近の事情及びわが貿易界の慣行を知るには国際電信電話株式会社発行の月刊誌「国際電信電話」を参照した。文法については特に確たる文法観を持っているわけでもないの
で、いわゆる学校文典を一通りやった人を基準に考えた方が实际的であろう。

III 単語の特色

Headline では限られた紙面で強力な表現を目ざすため「短い語」を選ぶ。OK=approve, Confab=conference, Red(s)=communist(s) そのため語の新旧・雅俗を問わず、意味も拡張したり普遍化する。また vivid な表現にするため擬声語など音調にも考慮を払う。Peking Raps Kishi (中共岸首相を非難)

電文ではむしろ「長くても内容豊富な語」を選ぶ。紙面よりも語数節約である。単語は一字でも一語で、十五字毎に一語と計算されるが、英語で十五字の語は長い方だから大した不自由はない。by cable (二語)=telegraphically (一語) Try hard や Do your best は 'endeavour' に、「もし適当な寸法の品が入手困難ならば」は 'if dimensionally unavailable' などと書き、語呂の悪さなど心配しない。却って短い語は脱落、混同をおそれて長い方を取る。or > otherwise; if > provided or subject (to); now > presently; if > whether, etc.

商用略語や術語の多いことはすべて専門的なことに共通だから特に述べない。

最も特色あるのは接頭・接尾辞による奇異な語形成である。特に *un-* と *-able* が活躍する。*un*¹- と *un*²- の区別や *in-*, *non-*, *dis-* との区別などさほど顧慮しない。'unship' は「船からおろす」意にもなるが 'unshippable' は「おろせない」のではなく「積めない」のである。'unacceptable' の如く尋常なものもあるが 'unbankable' の如く無理なものもある（書類不備のため銀行が手形買取りに応じない——銀行に通らないこと）。'unarrived'（まだ着かぬ）や 'unreceived'（まだ受取らぬ）の如く自動詞・他動詞に頓着しないものもある。'agreeable' の否定は *dis-* でなく、'unagreeable' で意味は「同意できない」、主語は人でも事物でもよい。普通の英語では comply に *un-*, *in-* をつけると uncompliant, incompliant となって多少用法も変るが、電文の 'uncompliant' は機械的に We can not comply with your wishes. (貴意に副いかねる) である。助動詞等に語数を費すことを恐れて *un-/able* を活用する。動詞の自・他、Voice は殆んど無視されている。

「複合語」を一語に連結してよいか否かは案外きびしく点検される。電信規則では「その国語の標準的な辞書にある」ことを判定基準にしているが、発信局が一語と認めた複合語も外国の着信局が承服せねば料金を追徴されることがある。国際電信電話株式会社は Oxford, Webster, Standard のような辞書でなければ国際的に対抗できないと見ているようだが、一般的慣行をかなり認めている。一般英語でも複合語の表記法には遅速がある。例えば air mail (名詞) から air-mail (名詞, 形容詞) 更に airmail (名詞, 形容詞, 動詞) へと状況は辞書に先行する。電報特有のものとしては地名 (Newyork) 船舶名 (Presidentwilson) などの連結例が多数認めら

れている。数字は五ケタ毎に一語なので100000は二語、hundredthousand は一語；その他2050 =twentyfifty, 135=onethreefive の如くどんな読み方を連ねてもよい。誤謬防止のため力めて文字で書く。尚、連結はハイフン (-) なしで行う。

わが貿易界は頻出する複合語を絶えず問題にし、国際場裡でも上記判定基準の合理化に奮闘している有様で、語学のみならず政治力の問題でもある。

IV 文章構成の特色

動詞の特色を中心に見て行くのが便利であろう。Headline を参考にすると、(1) Peking Raps Kishi の如く現在形は能動態で過去の出来事を、(2) Kishi Rapped Again (岸首相再び非難さる) の如く過去分詞は受動態で過去の出来事を、(3) Rok, Japan to Resume Talks (日韓、会談を再開せん) の如く不定詞で予定を、(4) 46 Running for Naha Assembly (那覇市会に46名立候補) の如く現在分詞で現在進行中のことを、それぞれ報じている。その他 D. C. Talks Big Success (ワシントンにおける会談は大成功) の如き Copula なき敘述も多い。

電文はこれほど事態が整然とせず、短縮の方法も区々で当事者すら時に誤解することがある。Headline は客観的報道であるから三人称主語が多いのは当然だが、電文は We (I) 対 You の対話で、We (I) を主語とする文も必要である。尤も We (I) は省略するし、You を主語とする陳述は少く、依頼や命令になる。疑問も命令や陳述に変形する。その他は大部分事物を主語とする陳述である。Tense や Mood は Headline よりも variety を必要とするが、語数、特に助動詞を節約しようとするから甚だ不自由である。英語の動詞そのものには *Root*, *-s*, *-ed*, *-ing* の四形しかなく (不規則動詞について自明のことは略す)、これだけでどんな事態を表わし得るか、またどんな混乱が起きるか、それを避けるのに実際界ではどんな工夫をしているか等を見て行こう (-s は三人称単数現在に限られるから問題は少い。 *-ed*, *-ing* は分詞・動名詞・形容詞等として一般の働きもするが、こゝでは述語動詞としての特殊な用法を見る)。

(1) Copula なき敘述「AはB (なり)」は電文の一基本形式とも言うべく、「名詞+名詞」もあるが圧倒的には「名詞+形容詞」で *un-/able* の活躍することは前述の通りである。

「在庫品がなくなりそうだから是非四月中に船積していただきたい」は 'stock scarce April shipment essential' 「この申込をすぐ受諾されないと却って損ですよ」は 'hesitation unadvisable' のようになる。If you do not accept this at once>If you hesitate>hesitation の如く複雑な内容なるべく一語に、動詞的な表現を名詞に煎じつめる。

これは電文に限らず action-noun, nexus-substantive などと呼ばれる語をはじめ、一般に簡潔な英文を書く時に行われる。便宜上ここで触れたが、主語に限ったことでもない。

(2) 「名詞＋過去分詞」も基本形式の一つで、「見本を航空便で送った」は ‘airmailed samples’ よりも ‘samples airmailed’, 「許可下りた」は ‘license granted’ となる。「御協力乞う」は ‘solicit cooperation’ でもよいが ‘cooperation solicited’ とする。Tense は ‘order 135 shipped Taiyomaru 10th’ (注文第135号10日に太洋丸で積み出した) の如く「過去の副詞があれば英語では現在完了は使えないことになっているから過去である」などと言うのは形式上のことで、電報で弁ずる用向を実質的に考えれば、過去の行為で且つ現在に影響ある場合が多く、また動詞の性質(動作的か状態的か、完結的か非完結的か)等によって現在完了あるいは現在のこともある。実用上誤解のおそれは少い。

-ed 及び一部の不規則動詞では過去・過去分詞同形だから ‘order 135 shipped Taiyomaru ...’ は We shipped ... の略ではないか等と実務家の間で議論のための議論が行われたこともあったが、実質的に誤解は少い。普通英語では過去分詞の性質・用法から推して受動的と見るのが至当のようであるが、電文の特色として Subject は必ずしも文法的主語でない事も考えなければならない。日本語の主語に似て先ず「何々は」と話題を出しておいて「何々した(する)」と述べる際には一人称で能動態のことも多い (Cf. ‘order 135 shipping Taiyomaru ...’)。しかし受動態の発達している英語では ‘draft drawn Tokyo Bank’ (手形は東京銀行を通じて振出した) はよいが ‘draft drew ...’ は拙い。‘draft dishonored’ (不渡りになった) の如く第三者の行為では we の省略と言えない。

(3) 電報は単なる報知に終ること少く依頼や命令を伴うことが多いから、「命令文」も多い。‘open credit’ (信用状を開け) ‘expedite shipment’ (船積を急げ) 等は明瞭で、それに ‘please’ を冠すればよほどいいねいになる。また 文頭の標識 として句読点と礼儀の一石二鳥をねらって ‘please’ を使うこともある。前述の如く「件名」を文頭に出すことも多い: ‘credit 1234 extend September 30th’ (信用状第1234号九月三十日まで延長せよ)。

ところが ‘offer cement ...’ は We offer なりや命令なりや、意味上すなわち何れがセメントの売り手なりやによって当事者にはわかる筈であるが、offer には売りも買いもあり、状況によっては判断に迷うこともあるので、We offer の時は ‘offering’ とすべしという内規を持つ商社がある。けだし -ing は We are -ing であるから命令文と区別できると思うのだろうが、次段で述べるように「近接未来」と混同するおそれの方が大きくて不利である。

(4) 残る形は現在分詞 *-ing* のみとなったが、これ一つに負担がかかりすぎる観がある。即ち a. 単に命令文と区別するために *We do.* の代りに ‘*doing*’ としたり、b. いわゆる現在進行中のことを述べるのは勿論、c. 「近接未来」や「意図」のみで現実にはまだ始まっていないことを述べるにも使う。

-ed を能動的と解しても受動的と解しても実質上大きな支障はなかったが、*-ing* は文脈・場面に依存すること大きく、当事者間にも誤解を起すことがある。

‘*prices rising*’ (物価上昇中), ‘*negotiating makers*’ (メーカーと交渉中), ‘*samples preparing*’ (見本準備中) など動詞の自他、態、語順等は区々であるが、これらの時制は文脈上別段の影響がなければ現在進行中と考えてよい。ところが ‘*leaving (arriving) Tokyo tenth*’ 「十日東京発(着)の予定」の如きいわゆる往来発着の動詞のみならず、‘*airmailing samples*’ (見本をこれから空送する場合), ‘*writing*’ (委細フミ) に見られる如く、実際の動作はまだ始まってなくて「近接未来」ないし「意図」のこともある。普通の文章においても口語体などではこの傾向があり、また *be going to* ～ の連想もあって、電文の *-ing* では動詞の意味・性質におかまいなく未来性を持たせるから混乱が増す。

‘*US suspending scrap export*’ では米国が現にスクラップの輸出を中止しているのか、近く中止するのかアイマイである。現在なることを明示するつもりで ‘*is*’ を補っても改善されたことにならず、‘*now*’ のような副詞を補う (‘*presently*’ は同じくアイマイであるのに 実際界に多く見受けるのは解せない)。未来なることを明示するには *will* を、「中止するらしい」ぐらいならば *may* を用いてもよいが、むしろ ‘*suspending shortly*’, ‘*likely suspending*’ の如く副詞の方が「気配」をよく表わす。

このように *-ing* が現在にも未来にも用いられるので取引上紛争を起した例がある。或る申込みに対して ‘*accepting*’ なる回答は「承諾の意思表示」として完全なりや? 「国際電信電話」誌上には1955年以来学者・実務家を混えて議論沸騰、内外の文法書を引用しての論戦は壮とするも、実際には *accept* も *accepted* も *accepting* すら完全承諾の意思表示として使われている のだから始末がわるい。‘*accept*’ ‘*accepted*’ に異存はないとして、‘*accepting*’ は単に命令と区別するための *We accept* であるとも言えるし、反対に「承諾するつもり」とは言ったが「承諾した」とは言わなかったとがんばることもできる。普通の文法と電文の約束、また或る語形の表わし得る幾多の意味の中どれを採ったか、異なる論拠に立って、しかも悪意を以て対決すれば、意思が通じないのはコトバの宿命である。‘*be going to accept*’ は承諾の意思表示として不十分という判例もあり、字句上は正にその通りだが、近接性や十分な意図のあることは否めない。

誤解を避けるには、*-ing* は主に現状描写に用い、accept や offer のような進行形にしなくてもよい動詞（その他 進行形使用の 稀な動詞は文法書に扱われている）は敢てする必要もなく、*-ing*を以て未来や意図を表わすには時期や条件を明示の方がよい。例えば、「123番の品は売切れに付、122番を提供する（現に提供している）」には ‘onetwothree exhausted offer onetwo-two’ でよく、‘offering’ とすれば却ってアイマイになる。後日提供するなら ‘offering later’ ‘offering when available’ の如く時期を示す。また、‘accepting if April’（もし四月積なら受諾する）と条件付ならまちがいはないが、‘acceptable if April’ に若かず、まして条件は満足だが「目下努力中」「考慮中」というのなら ‘working’ ‘considering’ など別の語を以て明示すべきである。但し先方の電文を読むには相手の「クセ」と前後の状況から判断せねばならぬ。

(5) 助動詞の節約で著しいのは疑問文で。Can you make April shipment? は ‘telegraph possibility April shipment’ 「金巾はいつ積出せるか？」は ‘telegraph when shirting shippable’ 「……積出す予定か」なら ‘... shipping’ 「……積出したか」なら ‘...shipped’ となるのは言うまでもない。

変ったところでは you の単数 thou に対する動詞語尾の -st を利用して ‘canst offer’ は W ecan offer でもなく You can offer でもなく “Can you offer?” の意と解する。尤もあまり行われぬが、かくまで無理をする例としてあげた。 “?” も使えるが脱落を恐れて、これのみで疑問を表わさない。

(6) 句読点を用いずに文の切れ目を明らかにすることには時々触れたが、意味や脈絡から当事者にわかる切れ目の外に、二三の目印がある。大きな段落（用件の変り目）に STOP の一語を用いることもあり、「件名」を文頭に立てたり命令文に ‘please’ を冠したりする。大きな手がかかりは接続詞だが because は because of の略ともなる如く、前置詞との間を峻別しない。and, also/but, however/or, otherwise/because, owing, due/whether/if, provided, subject/unless /while, though / when, till, before などが多く、一般英語におけると同様省略が起り易く (if necessary; when ready, etc.), また subject space available は subject to space being available で、provided ならば provided that space is available であるなどと意識する必要もなさそうで、これらは概ね前後の論理関係を示す記号に近い。その中理由を示す語句は推測容易で省けることも多い。 ‘serious claim lodged due containing excessive dust’（ゴミが入りすぎていて重大なクレームを起された）は拙い打ち方で、 ‘serious claim lodged dust excessive’ でわかる。同様に ‘buyers holding off because government attitude still

uncertain' (政府の態度依然確かならず買手は控えている) は 'government attitude still uncertain buyers withholding' の如く理由の置き場に工夫する。前置詞も明らかなものは省略するが、商慣習に依存するものは特殊である。'reply Tuesday morning' や 'reply Tuesday noon' は共に「火曜日正午までに返事が到着するように」と解するが、「到着」を明示するには 'reply *here* Tuesday noon' などとする。

V 現状改善の必要

余白もなくなったし、またこれ以上個々の短縮法に入っても単にテクニックの問題となるから今回は一応代表的構文、特に動詞の検討に止める。

たゞ実業界の現状はかなり混乱していて学校出の新任者などは切に指針を求めているようである。例えば次の諸例は「国際電信電話」所載の模範電文で斯道のベテランの作であるが、一読明瞭とは言い難い。

(1) L/C 81198 SPECIFIES CANDF AND FOB REQUIRING ACTUAL FREIGHT
INVOICED AMEND ALLOWING FREIGHT NECESSITATED OTHERWISE
HONKONG DISAGREE ESTABLISHMENT L/C RESULTING UNSHIPABLE

言わんとするところは「信用状第 81198 号には運賃の入った値段と入らない値段が明記しており且つ送状には実際の運賃も明記せよとあるが、運賃に変動ある時は運賃込値段が変わるのでそれを認めるよう修正してほしい。さもなくば香港側は信用状開設に応じないので船積できない」であるが、actual freight と freight necessitated の別もわかりにくいし resulting unshippable も英語らしくない上に必ずしもいらない。ベテランの作を訂正する意図はないが私案を示せば 'L/C 81198 requires invoicing actual freight while prices fixed please amend allowing CANDF fluctuate with freight otherwise Honkong refuses opening L/C' (同語数)

(2) ORDER 1234 ARRIVED REQUIRE AIRFREIGHTING SPECIFIED TOTALLY
ENCLOSED 1/2HP MOTOR REPLACING OPEN TYPE OTHERWISE DRIP-
PROOF LEASTWISE IF DIMENSIONALLY UNSUITABLE RETURNING
OPEN IN EXCHANGE CABLE

大意は「弊注文第1234号の品安着、ただし 1/2 馬力の電動機は開放型では注文に反するから、代りに指定通りの全密閉型を空輸されたし。もし寸度上不適当ならば少なくとも防滴型を送れ。開放型は代品と引換えに返送する。返電乞う」

-*ing* は三つあるが *airfreighting* は動名詞的, *replacing* は分詞構文的, *returning* は *will return* である. -*ed* も三つあり *arrived* は過去, *enclosed* は *motor* にかかる形容詞役としても, *specified* が *as specified* の意とすれば無理な語順であろう. 前述した基本形式にもっと近づけて ‘*order 1234 arrived but 1/2 HP motor open type against specification airfreight totally enclosed or dripproof if former dimensionally unsuitable returning open in exchange reply*’ (同語数) とでもすれば単純明瞭になる.

混乱の主な原因は、一つの形式が幾多の意味を負担し得るからとて、比較的少い用法まで動員して独断的に用いるからであって、電文の文法は上述の如く大雑把なものであることを銘記し、常に圧倒的用法に従い、文脈・場面から万人とまで言わずとも少くとも当事者に誤解の余他なき圧縮を行わねばならぬ。紙面が許せば面白い例も沢山あるが割愛する。

尚、電報には種類によって最低限料金ともならみ合わせて短縮を行う必要もあり、また圧縮された文体であるから先方に与える印象も強烈で、心理的・修辭的考慮が必要である。これらも目下整理中であり、更にもっと確たる言語観・文法観から御叱正をいたゞき、現状の混乱に指針を与え、明瞭にして *decent* な電文を目ざして考察をつゞけたい。妙な題材で学報を汚すことをおそれるが、英語の実用面を担当する者として、名刺代りになれば幸いである。他の国語ではどうなっているか、ぜひ御教示仰ぎたい。

(1957年8月30日)